

パリだより：ユネスコ日本大使からの手紙（第４号）

「現在と過去の絶え間ない対話：国際知的協力１００年の記憶」

２０２４年９月２７日

ユネスコ日本大使の加納です。

９月に入り、オリンピック同様、日本選手の活躍が目立ったパラリンピックが終わると、パリはすっかり秋らしくなりました。日本はまだ残暑が厳しいのでしょうか。

８月は、日本では、過去の歴史を振り返り、戦争と平和について考える機会の多い季節です。広島と長崎の原爆、終戦記念日という、第二次世界大戦末期の節目の日が続くことによるのでしょう。

今回は、８月のパリにおける戦争の記憶と、ユネスコおよびその前身組織にまたがる、国際知的協力の歩みについて触れたいと思います。

（８月のパリ：「８月の砲声」と「パリは燃えているか？」）

今から１１０年前の１９１４年の夏、欧州で勃発した第一次世界大戦を描いたノンフィクションにBarbara Tuchmanの“The Guns of August”（「８月の砲声」）があります。サラエボ事件から第一次世界大戦の勃発、そしてパリ東方のマルヌ会戦直前までを描いたものです。私は１０年前の夏にウィーンに赴任する際に読みました。パリはドイツ軍の進撃を辛うじて免れ、パリを守る司令官が、市内のタクシーを動員して、兵員・物資の輸送を命じるところでこの本は終わりますが、実際の陰惨な戦闘は、その後数年にわたり続きます。

その３０年後の１９４４年の夏、第二次世界大戦の後期、パリは再び歴史の焦点になります。４年にわたるドイツ軍の占領下に置かれたパリが、ノルマンディ上陸から進軍した連合軍により解放されるのが同年８月２５日。フランスの対独レジスタンス諸勢力、連合軍、ドイツ軍首脳部と現地司令官を巻き込んだ、武装蜂起と市街戦、そしてパリ解放に至るまでの複雑な過程については、Larry CollinsとDominique Lapierreによるノンフィクション“Is Paris

burning?”（「パリは燃えているか？」）に克明に描かれており、1966年にはルネ・クレマン監督の下、アラン・ドロンやオーソン・ウェルズが出演する映画にもなりました。今年がパリ解放から80周年ということで、モンパルナスの対独レジスタンスの活動拠点だった場所にあるパリ解放博物館では特別展も開催されていました。

8月のパリは日本と同様、戦争と平和について考える材料に事欠きません。



パリ解放博物館の外観（左）と展示（右）（筆者撮影）

（国際知的協力機関の設立）

二度の世界大戦に見舞われた欧州において、戦争を克服し、平和を構築するアプローチとして模索されたのが、「国際知的協力」です。戦争の根本原因が諸国民の間の相互理解の欠如にあるとして、各国の有識者に世界が直面する課題について議論、提言してもらい、教育、科学、文化面での国際交流や協力を進めることが恒久的な平和につながるという考え方です。

まず、1922年にジュネーブの国際連盟の諮問機関として、12人の著名な有識者からなる「国際知的協力委員会」が設立されました。12人のメンバーにはフランスのアンリ・ベルグソン、マリー・キュリー夫人や、ドイツのアルバート・アインシュタイン博士（後に米国に帰化）などが名を連ねています。国際連盟からは日本の新渡戸稲造・事務局次長が、同委員会の運営に関与していました。

この国際知的協力委員会による提言の実施機関として、フランス政府が誘致し、パリに設立されたのが「国際知的協力機関」です。国際連盟がフランスの

提案を受け入れる決定をしたのが、今から１００年前の１９２４年９月です。この国際知的協力機関はパレ・ロワイヤルに設置され、１９２６年から活動を開始しましたが、第二次世界大戦の勃発とドイツによるフランス占領に伴い、１９４０年から１９４４年まで閉鎖されます。戦後の１９４５年に再開しましたが、同年にユネスコ憲章が採択、ユネスコ発足が決定したことから、翌１９４６年に活動を終え、関連資料はユネスコのアーカイブに引き継がれました。

（国際知的協力１００年の記憶）

国際知的協力機関の設立決定から１００年を記念した国際会議・資料展示（“Celebrating a Century of Intellectual Cooperation: From Legacy to Future Action”）が、９月１３日にユネスコ本部において開催されました。現在、ユネスコ総会議長を務める、ミクレスク（Simona-Mirela Miculescu）ルーマニア代表部大使の強いイニシアティブによるものです。

会議は、ミクレスク総会議長、アズレー事務局長の挨拶に始まり、その後、各国の様々な学術分野の専門家やアーキビストにより、国際知的協力機関からユネスコに至る過去１００年の歴史を振り返りつつ、今後の国際知的協力のあり方について活発な議論がなされました。



スピーチを行うミクレスク・ユネスコ総会議長とアズレー事務局長 (@Sacha HERON/UNESCO)



パネルディスカッションの様様 (@Sacha HERON/UNESCO)

また、この会議に合わせて、ユネスコ・アーカイブに所蔵されている貴重な資料が公開されました。

会議場では、1950年代にユネスコがフランス、イタリア、日本で行っていた、成人教育のためのテレビ普及事業の様子を描いた当時の映像フィルムが上映されたほか、資料展示スペースでは、国際知的協力機関時代の貴重な文書、文献が展示されました。中でも目を引いたのは、1922年に開催された国際知的協力委員会の第一回会合の議事録です。会議の冒頭、議長を委員の互選で決める前に暫定議長を務めた新渡戸稲造・事務局次長が、同委員会開催の趣旨、意義について説明している箇所を見つけることができました。また、国際知的協力機関の各国文献翻訳事業において作成された、夏目漱石の「こゝろ」のフランス語訳版も展示されていました。





ミクレスク総会議長と筆者 (@Sacha HERON/UNESCO)

ユネスコのアーカイブには約20年分の国際知的協力機関時代の資料と、約80年分のユネスコ時代の資料があります。文書、写真、音声、映像データなど膨大な資料がユネスコ本部地下倉庫に眠っています。私も一度訪れましたが、これら貴重な資料の劣化への対処が課題となっています。特にユネスコのアーカイブで保管されているフィルムは、その約3割が化学変化による劣化の脅威にさらされており、このまま何も手を打たなければ数々の貴重な動画が永久に失われてしまうおそれがあることから、緊急にデジタル化やフィルムの保全措置を施す必要があります。

これら貴重な資料を保存し、デジタル化して幅広く活用するプロジェクトを日本も支援していますが、十分ではありません。アーカイブ所蔵資料のデジタル化はまだ5%にとどまっていると言われてしています。このための支援を各国に呼びかけることも、今回の国際会議・資料展示の開催目的でした。

今回の国際会議・展示の実施には、日本がフランス、ルーマニアなどとともに支援を行い、私もスピーチを行いました。私からは、

「当時の資料によれば、第一次世界大戦後に実に多くの人々が知的協力を通じて平和の推進に貢献しようとしていたことが分かる。」



スピーチを行う筆者 (@Sacha HERON/UNESCO)

「国際知的協力による平和推進のミッションは第二次世界大戦後に設立されたユネスコに引き継がれているが、依然として戦争・紛争の苦難に対処している現在の国際社会では、未だ達成されていないミッションである。」

「このような状況においてこそ、過去の経験を幅広くアクセスできるようにすることは極めて重要である。」

「英国の外交官、歴史家であるE.H. カーは、『歴史は現在と過去の絶え間ない

対話である』と述べた。ユネスコのアーカイブはそのような対話のプラットフォームであるべきで、我々が過去と対話し、将来に向けた行動のための知見を得るための窓である。」

と述べ、アーカイブ資料の保存、デジタル化への協力を各国に呼びかけました。

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

次回のパリだよりをお楽しみに。

ユネスコ日本政府代表部大使

加納雄大